



コロナと文化芸術、コロナ後の世の中 変わるものと 変わらないもの

今年の市長新春対談は、映画監督の崔洋一さんをお招きしました。コロナ禍における文化芸術が持つ役割や、コロナ後の世の中について語っていただきました。

※感染症対策を徹底したうえで、実施しています。

大和フィルム
フェスティバルから
見える大和の特異性

大木 崔監督は数多くの映画作品を撮られてきました。これらの作品をごらんになったことがあるかたも大勢いらっしゃるかと思います。私も映画は好きで、以前はよく見に行きました。ただ、市長に就任してからというものの、土日、祝日関係なく市役所に出ておりますので、映画館に足を運ぶことはなくなってしまうました。地震など、いつ何が起るかわからないということを考えて、24万人の市民の皆さんに対する責任からも、私は自宅ではなく、休日もなるべく市役所において迅速に対応できたらと思っています。今は残念ながらテレビで映画を見ている状況ですが、いつかまた、映画館の大きなスクリーンで映画を楽しみたいと思っています。

ています。

さて、大和市には映像文化の推進に寄与することを目的とした大和フィルムフェスティバルという映画祭があるのですが、崔さんは長年、この映画祭のショートフィルムコンテスト特別審査員を務めていらっしゃいます。このフィルムフェスティバルを通じて、どのようなことを感じていらっしゃいますか。

崔 一番体感したことで言うと、大和の最大の特徴は特異性ですね。人口は増えているし、さまざまな国の人々や多様な文化を持つかたたちが集積されています。自分が関わりがあるから言うわけではありませんが、図書館のまちという一つの売りをはじめ、大和市は文化に対する取り組みの幅が広いと感じています。交通のアクセスだつて悪くない、流動することによって培われてきた自治